

〔特集〕

日本留学が切り拓いた研究人生への第一歩

包 薩出栄貴

名古屋学院大学大学院経済経営研究科後期博士課程

要 旨

中国語に「活到老 学到老」ということわざがある。次のような意味が、そこに込められている。「生きて行く限り、人は学び続ける。学問は死ぬまで続けるもので、これで終わりということはない」。

人間は社会的動物である。どの時代、どこの社会でも、我々は常に新知識を勉強し、イノベーションを起こし、成長していく。これは、社会発展にもつながるものである。また、私達は、生きるために食べなければならない。食べるためには、稼がなければならないし、そのためには仕事をしなければならない。では、どうすれば、研究（学業）と仕事を両立できるか。筆者の日本留学での生活を振り返ると、それは、目標設定、健康管理、スケジュール管理の3点を如何に実行するかにかかっている。

小論は、日本での留学生活を通して、仕事と研究さらに博士論文への挑戦が自らの人生と故郷（内モンゴル）に持つ意義を問い直したものである。

キーワード：イノベーション、異文化、スケジュール管理、日本留学、博士論文

A first step to research life in Japan

BAO Sachuronggui

Doctoral Course Student of Management Policy Major
Nagoya Gakuin University Doctor of Business Administration

1 はじめに

中国語に「活到老 学到老」ということわざがある。次のような意味が、そこに込められている。「生きて行く限り、人は学び続ける。学問は死ぬまで続けるもので、これで終わりということはない」。

私たちは、生きるために食べなければならない。食べるためには、稼がなければならないし、そのためには仕事をしなければならない。

では、なぜ働きながら学ぶのか。さらに研究するのか。人によってその理由は色々である。もっと多くの給料が欲しい、希望の職種に就職したい、自分の夢を叶えるため、など。学ばないと、時代の流れに乗りなくなる可能性もある。私たちは、働き・学び・研究するという循環を通して、イノベーションを起こし、成長していく。これは、社会発展にもつながるものである。誰かのために何かを行い、もっと多くの人に役に立ち、さらに真摯な研究を通して、自らの発達の可能性をも切り拓いて行く。では、どうすれば働きながら学び研究し、両者をうまく両立できるか。

そのような問題意識をふまえ、これまでの留學生生活や博士論文への試行錯誤の挑戦を整理したい。そこで浮かび上ってきたのが、①留学につなげた道、②日本での挑戦、③日本で学んだこと、④今後の課題という4つの視点である。小論は、日本への留学と博士論文への挑戦が、私の人生に、どのような影響をもたらし、今後の道にどうつなげることができるか、をまとめたものである。

2 日本への留学につなげた道

筆者は子供時代の無味乾燥苦な学業生活と厳

しい家庭教育の下、自由への道を渴望していた。その後日本のアニメに出会い、日本文化に憧れ、もっと外の世界を見たくなった。それが日本留学の道へとつながっていく。

2.1 中国「面子」文化

中国人は、とても面子を重んじる民族である。面子(miànzi)とは、世間に対する体裁を意味する。「面子を立てる」とか「体面をつくろう」という場合、その実がないのに表面だけをつくらって威厳を保つ態度、行動を意味している。こうした外面性、形式性に偏したいわば悪い面ばかりでなく、自己の面子を保ちながら他人の面子も重んじることにより、人間同士の交際に洗練と優雅をもたらす面もある(参照:コトバンク)。人々は何をしても、他人と比較して、自分の面子を保とうとしている。

人間は社会的動物だ、どの国でも、両親は子供に対して、優秀な人になることを期待する。でも育ち方は、その社会文化と時代、そして、その人の価値観によりいろいろである。子供の頃、夏冬休みは毎日塾通いほとんど休みがなく、学校の勉強も頑張っていた。たまの家族旅行が一番楽しい時間だった。でも、温順な表面とは裏腹に、自由への道を計画していた。

2.2 日本文化輸出としての——アニメ

日本文化として確かな地位を築き上げた「マンガ」と「アニメ」は、輸出されて世界へと飛び出している。2015年の世界的な市場規模は、漫画が24億ドル、アニメが135億ドル(推定)にまで達した。日本の「マンガ」と「アニメ」は1970年代から、特に中国や東南アジアへの輸出が好調であった。「ドラえもん」や「クレヨンしんちゃん」を始め、「ワンピース」や「NARUTO」といったアニメへの認知・人気

非常に高い。

小さい頃、日本のアニメが中国で一番流行っていた。今は、中国で日本のドラマへの人気も高まっている。そして、アニメやドラマにみる好調な海外輸出は、インバウンド市場へも好影響を与えている。アニメやドラマの舞台地を訪れる「聖地巡礼」が訪日客の間で流行している。

私も子供の頃から、宮崎駿先生のほとんどのアニメを見た。アニメを見て、日本文化への認知が高まり、日本に憧れを抱くようになる。もっと日本を知りたい、日本語を勉強したいと思った。そして、大学の時、2年間選択科目として日本語を履修した。でも、その時はまだ日本語が話せなく、日本語でペラペラ話すことは夢だった。

大学を卒業後（23歳の時）、内モンゴルホウリンゴルテレビ局（地方のテレビ局）で働いていた。最初は、仕事環境に好奇心旺盛だった。でも、すぐに新鮮感がなくなり、老年になって退職するまで、何十年間毎日同じ仕事を繰り返すと思ったら悲しくなった。若いうちにどこかに行き経験を積む。異文化に触れ、その国の人々の考え方を理解し、もっと広い視野を持ちたいと思った。そして、留学先は、「雪国」新潟に決まった。アニメと小説の他に、日本へ留学する決め手となったのは、英語圏より学費と生活費が数倍安いことであった。また日本では、週28時間以内のアルバイトができる。生活費はアルバイト代でなんとかなると思ったからである。

3 日本での挑戦

留学手続きは、順調に進んだ。両親と長期間相談し、2008年の秋、人生のはじめの一步日本へ留学することになった。

日本の学習環境はすばらしい。非常時に備え、教育設備は先進かつ一流で、多面的なカリキュラムが提供されている。講師陣のリソースも充実し、教育理念も世界をリードしている。また、政府や企業が留学生のために多くの手厚い奨学金や実習の機会を提供していることも魅力的である。各町区には図書館があり、学習環境は非常に整っている。

家の近くにスーパーもあり、便利な生活を実感した。緑に溢れた環境も、内モンゴルの草原の緑みたいに懐かしい感がある。しかし、初めての海外での生活は、簡単ではなかった。いろいろと自分で処理しないといけなくなり、また、言葉の壁が圧力になり、頼る人がいない生活の厳しさを実感した。衣食住は便利だが、現地に溶け込むのは難しいことにも気がついた。家賃が高く生活費も高いため、経済面で厳しくなり、これに加えて異国での孤独もストレスになっていた。日本での大学を卒業後、中国へ帰国した。

帰国後、内モンゴルに戻らず、北京に滞在し、旅行会社へ就職した。この間、日本での経験を反芻するなか、もう一回日本へチャレンジすることにした。2013年の秋仕事関係で、日本へ再び足を踏んだ。就職した時、仕事に対して自分の知識と能力が足りないところを気づき、まだ勉強し、成長する必要があると感じた。また、中国と日本で仕事の経験を経て、会社という組織の発展にサービスがいかに大事かに気づく。そして、日本のおもてなしサービスの魅力に憧れ、もっと深く勉強したいと思った。そこで日本のおもてなしサービスを研究する学校を探し、自分の希望の大学院に進学した。

3.1 興味とアルバイト

子供の頃から服が好きで、ファクションに興味あり、簡単なスカートと布バックなどをデザ

インし、つくっていた。日本でアパレル関係のアルバイトを長年している。普段からも服が大好きで、オシャレに興味を持っていた。実際に働くことでコーディネートを考える幅が広がって、様々な年代の方々と関わることができた。

父は、「好きなことで、他人の役に立つことをしなさい。きっと、自分の力にもなるよ」と教えてくれた。ファッションへの興味が、日本でのアルバイトにつながり、そして、研究への道につながっていく。

3.2 博士への進学と博士論文への挑戦

修士課程を卒業後、貧乏な内モンゴル故郷の皆さんに何かをできるかとずっと思ってきた。そのため、おもてなしサービス研究を深く勉強したいと思って、名古屋学院大学の博士後期課程へ進学した。十名ゼミで指導を受ける中で、次のような視点が見えてくる。1年間の研究、ふるさとの産業など現状分析を通して、はっきりわかったのである。

今の内モンゴルの課題を解決する方策として求められているのは何か。おもてなしのサービスもさることながら、自然・経済・文化を持続的に発展させることである。

しかし、この研究テーマをどう具体化するかが、つかめない。困り、悩みながら一年半の時間が過ぎていった。十名先生の指導を通して、内モンゴルで求められているサービスとは何か、を考え抜き、次のような見解にたどり着く。それは、自然・経済・文化を持続的に発展させるサービスであり、そのコアに位置するのが観光産業である、との見解である。

では、自分なりのオリジナルな観光産業論として出来上がるか。産業知識がない私は、自信がなかった。どこから手をつけ、何を研究すれば良いか。それがつかめないため、毎回ゼミま

で、研究報告として何を発表するかもわからない。その時、十名先生から「本当に研究を進める気があるのか」と厳しく問いただされた。自分が研究者として向いてないかと思った。博士論文への挑戦がまだ緒についたばかりなのに、白旗を上げたくない。その時、何のため、この研究を始めたかを自分にもう一度尋ねた。そして、研究を進めることを決意する。これが、博士論文への真のスタートにもなった。

これまで海外での観光地、現地調査と日本国内の現地調査内容を改めて書きまとめ、外発的と内発的視点から分析し、持続的循環型観光まちづくりを論文の柱とすることがやっと決まった。博士課程2年次のことである。

「目標達成に向けて計画的な学習を行う」ためには何が必要なのか。「この学習にはどのような方法が有効か」を考える課題分析、学習に向かう時間を作るスケジュール管理や、自己を律する力、……たくさんの要件が思い浮かぶ。

3.3 健康管理

「健康はすべてだ」これは、母の口癖である。そのため、いつもいくら忙しく、いくら頑張っても、疲れた時は休み、一時的に足を止めことにしている。その時、失敗に対した反省と新しい計画を立てきた。また、病気にならないように、毎日の運動と、健康食事を摂るようにしている。

子供の頃から、お肉と乳製品を中心にした生活習慣で、野菜と果物は嫌いだった。日本に來てから食生活を改善することができた。

3.4 スケジュール管理

博士課程に進化してから、仕事と研究を両立することは、私にとってもう一つの挑戦だった。アルバイト時間は普段週四日間で、残りは図書館での文献調査と論文作成に絞っていた。デー

タを集めるため、現地調査に行っている。特に、現地調査の場合、かなりの時間とマネーがかかる。そしたら、アルバイト時間を増やさなければならぬ。でも、研究が忙しくなると、逆にバイト時間を減らして、週に週3日以内にしている。バイト時間を減らすと経済的ストレスがたまり、勉強に集中できない。このような研究とバイトのトレードオフに悩む日々が2年ぐらい続いた。

今は、週四日間アルバイトにし、休みの日を、午前中と午後と分けて、学習することになっている。スケジュール管理がどれほど重要かを痛感するも、まだ、うまくいく方法を見つけてない。

4 日本で学んだこと

日本での留学生生活を振り返ると、一番ありがたいのは、中国から離れ、親戚から離れたが、日本での学校の先生、周りの知り合いはみんな優しい人であり、色々教えて頂き、手伝ってもらっている。特に、十名先生には、学業の指導だけではなく、人生の指導もいただいている。

同郷（内モンゴル出身）で十名ゼミOBの白明さんは博士論文を拝見して、十名先生と出会うことができた。

十名ゼミには、留学生だけではなく、大学の先生まで、いろいろな職業の社会人が集う。そのため、毎回ゼミでは彼らの発表と議論を聞くだけで、幅広い知識に触れる。筆者が発表するとき、いつも皆さんから色々コメントをいただく。これも十名ゼミの大きなメリットである。また、1・2年目の公刊論文2本の原稿は、いずれも期限ギリギリで提出したが、十名先生とゼミの先輩（太田さん、櫻井さん、富澤さん）に校正していただくなど、大変お世話になっている。同級生の程遠紅にも、学校の色々資料申請

に応援いただいている。ゼミの指導教員や先輩、同輩の皆様には心から感謝申し上げたい。

そうした中、日本文化の探索という興味深い面がある一方で、不慣れなことへのとまどいと挑戦も多くあった。依頼感が減り、独立性が強くなった。

アルバイトすることにより、お金を稼ぐことは簡単ではないことがわかり、お金を大事に使うようになった。無駄な電気は使用しない、贅沢な買い物はしない、節約の意識が高まった。中国の場合は接待などの場では食べきれないほど料理を供することが「もてなし」とされるが、日本では「浪費」と見なされる。それゆえ、日本で暮らしているうちに食べきれ分だけ注文するという日本式のスタイルが身についた。

「化粧は女の身だしなみ」という日本文化に触れ、化粧するようになった。「公的自意識」と「非言語コミュニケーション」視点から「化粧」は自我の形成および対人関係の構成に貢献している。表現的化粧による外見の修正や変更は、本人がどのような人間であるかを発するため情報を補強、強化するものであり、コミュニケーションにおいて重要な役割を担っているとも言われている。

他にも、おもてなしサービス研究により、日本のおもてなし文化への理解が深まった。

5 おわりに—今後の課題

子供の頃、遊び時間が少なく、悲しい生活だったと思っていたが、今から見ると、幸せだったと評価する。両親の厳しい教育があったから、道はずれることなく、健康でいつも前向きな価値観を持ちことができた。これは一人の人生に何よりであると思う。

そして、日本へ留学することができ、以前に

考えていたほど留学生生活は楽ではなく、大変なことも多いが、この経験が自分を自立させて強くし、今あるものを大切にする事の重要性がわかった。また、中国での生活は失敗を怖がっていたが、日本では、失敗しても立ち直り、何回でもチャレンジできるようになった。

日本語を習得し、日本文化を理解する同時に、自分の国や言語への理解さらに世界への理解を深めた。

現在、もっと大きな問題に直面している。今年から、妹も新潟大学の博士後期課程に進学し、東京から新潟まで通学している。2人とも東京に住んでいるため、毎月の交通費だけでも10万円近くかかっている。どちらかが、学校をやめ、就職しなければならなくなった。私は今、日本での就職活動を始めている。

博士論文の柱をやっと見つけ、論文の完成に向けて全力を傾注している段階である。論文は卒業までに完成できるかどうかまだわからないが、最善を尽くしたい。博士論文は、出来上がってからが本当の勝負所となり、最短でも1年は

かかるとのこと。就職すれば、仕事も責任が重くなり、よりハードになるとみられる。文字通り「働きつつ学び研究する」という「働・学・研」融合を実践することになる。今を大事にし、頑張っていこうと思っている。

大人になると、さまざまな勉強をすることで見識が深まり、充実した人生を送れることも分かってきた。日本留学が切り拓いた創造的な仕事と研究の人生を、大切にしていきたい。

研究業績

- 包 薩出栄貴 [2018] 「クルン（庫倫）旗の観光まちづくり—富山市・鳥取県・足助町のモデルをふまえて」名古屋学院大学大学院経済経営論集 第21巻
- 包 薩出栄貴 [2019] 「臨海地域の観光産業にみる外発的発展の光と影—持続可能な循環型観光まちづくり視点から」名古屋学院大学大学院経済経営論集 第22巻